

【史料1】

柿本朝臣人麻呂、石見の国より妻に別れて上り来る時の歌二首 并せて短歌

石見(いはみ)の海 角(つの)の浦廻(うらみ)を 浦なしと
人こそ見らめ 潟(かた)なしと 人こそ見らめ よしゑ
やし 浦はなくとも よしゑやし 潟はなくとも いさな
とり 海辺(うみへ)を指して 和田津(にきたづ)の 荒磯
(ありそ)の上に か青く生(お)ふる 玉藻(たまも)沖つ藻
(も) 朝羽(あさは)振る 風こそ寄せめ 夕羽(ゆふは)振
る 波こそ来寄(きよ)れ 波の共(むた) か寄りかく寄る
玉藻(たまも)なす 寄り寝し妹(いも)を 露霜の 置き
てし来れば この道の 八十隈(やそくま)ごとに よろづ
たび かへり見すれど いや遠(とほ)に 里は離(さか)り
ぬ いや高に 山も越え来ぬ 夏草(なつくさ)の 思ひ萎
(しな)えて 偲(しの)ふらむ 妹が門(かど)見む 摩けこ
の山 (2-131)

反歌二首

石見のや高角山(たかつのやま)の木の間より我が振る袖を
妹見つらむか (2-132)

小竹(ささ)の葉はみ山もさやにさやげども我は妹思ふ別れ
来ぬれば (2-133)

【史料3】 正徹日記(上)(正徹物語)

△日本古典文学大系 65 歌論集・能楽論集

八 人丸の木像は石見国と大和国にあり。石見の高津といふ所也。此所は西の方には入海有りて、うしろには高津の山がめぐれる所に、はたけなかに宝形造の堂に安置したり。かたてには筆を取りかたてには紙をもち給へり。木像にて御座也。一年大雨の降りしころは、そのあたりも水出で、海のうしほもみちて海に成りて、この堂もうしほか波にひかれて、いづちとも行きがたしらず(うせ)侍りき。さて水引きたりし後、地下の者その跡に畠をつくらんとて、すき鍬などにて掘りたれば、なにやらんあたるやうに聞えしほどに、掘り出して見たれば、此人丸也。筆もおとさず持ちて藻屑の中にましくたり。たゞ事にあらずとてやがて彩色奉りて、もとのやうに堂を立て安置し奉りけり。此事伝はりて二、三ヶ国の者ども、みなくこれへ参りたりけるよし、人の語りしを承り侍りし。此高津は人丸の住みたまひし所也。万葉に、

石見野やたかつの山の木の間より我がふる袖をいも見つらんか

といふ歌は、爰にて詠み給ひし也。是にて死去有りけるなり。自逝の哥も上句は同じもの也。

石見のや高津の山の木の間よりこの世の月を見はてつるかな

とある也。人丸には子細ある事也。和哥の絶えんとする時必ず人間に再来して、此道をつぎ給ふべき也。神とあらはれし事もたびくの事也。

○「正徹物語」の成立については、文安五年とする説と宝徳二年頃とする説があるが、しばらくここに収める。